

西行自歌合注釈(二)

武 田 元 治

前稿に続き、『御裳濯河歌合』の七番以下、十九番までをとり上げる。

七番 左持

三 ねがはくは花のもとにて春しなむその二月(つばき)のもち月のころ

右

一四 こむ世には心のうちにあらはさむあかみやみぬる月のひかりを
左の、花の下にてといひ、右の、こむ世にはといへる、心(こころ)とも
深きにとりて、右はうちまかせてよろしき歌体なり。左は、ねが
はくはとおき、春しなむといへる、うるはしきすがたにはあら
ず。其体(かた)にとりて上下(かみもと)あひかなひて、いみじく聞ゆるなり。さり
とて深く道にいらざらむ輩は、かくよまむとせばかなはざる事あ
りぬべし。これはいたれる時の事なり。姿は雖レ不二相似一、なずら
へて持とす。

【通釈】

七番 左持

三 願うのは、桜の花の下で、春死にたいということですが、——あの
釈迦(しやくか)の涅槃(ねはん)に入られた二月の十五日、満月のころに。

右

一四 来世には、心の内に現れたいと思う、——この世で見飽きること

のなかった、美しく澄んだ月の光を。

左の歌に「花の下にて」と詠み、右の歌に「こむ世には」と
詠んでいるのは、ともに思い入れが深い、それにつけて言う
と、右の歌は全般的により歌の姿である。これに対して左の歌
は、「ねがはくは」の語を置いて「春しなむ」と言っている点、
整った姿ではないと思う。ただこの一首の姿として見ると、上
下の句がよく調和して、極めて優れたものと思われるのである。も
っとも、歌道に深く達していない人々が、これに倣って詠もうと
すれば失敗するに違いない。こういう歌い方が成功するのは、
(この歌の作者のように) 歌道をきわめた人の場合に限られる。
左右二首の歌の姿は同様とは言えないが、あえて同列に置いて比
較して、持と判定する。

【注】○ねがはくは 願うことは。漢文訓読による語法。この言葉で
始まる歌は、八代集では、「ねがはくはしほし闇路(やみぢ)にやすらひてかか
げやせまし法(ほう)のともし火」(『新古今集』一九三一、慈円)の一首のみ
である。ただし八代集以外では「ねがはくはくらきこの世(よ)のやみを出
でてあかきはちすの身ともならばや」(『和泉式部集』四四六)が用例
として古い。○花のもとにて 『御裳濯河歌合』では諸本この形が一
般的であるが、『山家集』では「花のしたにて」または「花の下にて」
とある。○二月のもち月のころ 二月十五日、満月のころ。陰暦の二

月十五日は春の半ばであるが、また釈迦入滅の日。西行の没したのが文治六年二月十六日で、その月日が歌と一致したのに人々が感動したことは、俊成の『長秋詠藻』六五二詞書、慈円の『拾玉集』五一五八等詞書などから察せられる。○こむ世 来世。死後に来るべき次の世。○心のうちにあらはさむあかみやみぬる月のひかりを この世で見飽きることのなかった澄んだ月の光を、心の内に現れたいと思う。仏教では月を人間本来の澄んだ心の象徴としてとらえる見方がある。密教の月輪観は、本心は清浄完全な満月と等しいと観ずる法である。そのような意味で、澄んだ月を心中に実現したいと願っているのである。○うちまかせて 一般に。概して。○うるはしきすがた 格に合った、整った歌の姿。

【考察】この七番も左が花の歌、右が月の歌の組み合わせで、西行自身の花あるいは月との関係をとり上げた歌である点は、前の六番の場合と同様である。しかし六番の二首が過去から現在に至る関係を願望としたものであったのに対して、この七番の二首は未来での関係を願望として歌った作である点が違っている。またこの七番の二首は西行の仏者としての心が濃く出ている点も、六番の場合と異なる特徴である。

二首のうち左の歌は、『山家集』(七七)に「花の歌あまたよみけるに」の詞書をもつ歌群の中に見え、従って晩年の作ではないと思われる。『西行上人集』(五二)には「花」と題する歌群の中にあり、『続古今集』(一五二七)では「花歌中」として収められる。右の歌は、『西行上人集』(五三八)に「述懐の心を」と題する歌群の中に見え、『千載集』(一〇二三)には「月歌とてよめる」として収められる。

それで二首は、それぞれ花の歌、月の歌に違いないが、また勅撰集では雑の部に収められたりしていることが示すように、単なる春の歌や秋の歌ではなく、作者西行の未来についての個人的願望の強く出たものになっている。

左の歌は、「花のもとにて春しなむ」と歌い、それも「二月のもち月のころ」、釈尊の涅槃に入られたころに死にたいと願っている。花

への愛着と仏への信仰をもつ心から出た願いを、言葉を飾らず率直に歌った作である。一首の初句「ねがはくは」は、「注」に挙げたように『和泉式部集』に古い用例が見えるけれども、一般に歌での用例はごく少ない。この語は仏教関係の願文や表白文に用いられるところから、西行としては自然に用いたのであろうが、漢文訓読に源をもつ言い方でもあり、一般には和歌に用いるには語調が強すぎると見られたかと思う。しかしこの歌の場合、西行の願いを端的に印象づける表現として生かされていると思われる。

右の歌は、現世で見飽きることのなかった「月のひかり」を、来世には「心のうちにあらはさむ」、澄んだ心境として現れたい、と歌っている。この心中に現す月は現実の月ではないが、仏教で澄んだ心の象徴とされるもので、西行にとっては観念的な存在ではなかったであろう。すると月への愛着と道心とを融合させた心による願いを素直に詠んだ歌と見られる。

俊成の判詞では、まず左右二首が「心ともに深き」ことを挙げている。これは二首が単に花月の美を詠むにとどまらず、花月を仏者の心の次元でとらえた思い入れの深さに注目したものであろう。そしてその上で左の歌の表現上の特徴を歌体の問題として挙げ、俊成の見解を記している。すなわち右の歌が「うちまかせてよろしき歌体」であるのに対して、左の歌は、

ねがはくはとおき、春しなむといへる、うるはしきすがたにはあらず。其体にとりて上下あひかなひて、いみじく聞ゆるなり。

と言う。この「ねがはくは……春しなむ」という上句を「うるはしきすがたにはあらず」とする理由については、諸家の説がある。「願はくは」とはじまり、『春死なむ』という死についての願いが、きわめて個人的な声として、率直すぎるほど率直に歌い出されているのを、嫌っている(窪田章一郎氏『西行の研究』)との見方もある。また「確かに照応しない表現である」(久保田淳氏『西行山家集入門』)との見方もある。それぞれ聴くべき説であると思うが、私見では、「ね

がはくは」で始まる漢文訓読に源をもつ表現が、和歌の伝統的な優雅な表現に比べて破格の強さを感じさせるような点を、主に意識した指摘ではないかと思うが、いかがであろう。ただ、いずれにしても俊成は、上句は「うるはしき姿」とは見えないが、この一首の歌体としては上下句が対応して「いみじく聞ゆる」ことを認めている。そして、このような表現を未熟な歌人が模倣することの危険を警告する内にも、「これはいたれる時の事なり」と、天成の歌人西行独自の表現の特長に触れている。

【備考】七番左歌は『新古今集』（一九九三）に一時撰ばれた後、切り出されたようで、『統古今集』（一五二七）に収められている。右歌は『千載集』（一〇二三）に収められている。

八番

左勝

一五花にそむ心のいかでのこりけむすてはてきと思ふ我が身に

右

一六ふげにける我が世のかげを思ふまにはるかに月のかたぶきにけり（大感）

右歌心いとをかし。但、左歌猶こともなくよろし。勝とや申すべき。

【通釈】

八番 左勝

一五花に執着する心が、どうして残ったのであろうか、——この世のことなど、捨て去ったと思うわが身に。

右

一六年老いたわが身の姿を思っているうちに、（いつの間にか）遠く西に月も傾いてしまった。

右の歌は、その心が大層面白く思われる。しかし、左の歌はやはり、特に目立つところもなく詠まれていて、よい歌である。勝と判定すべきかと思う。

【注】○花にそむ心 花の美しさに染まる心。桜の花に執着する心。○すてはてき この俗世のことは、心から捨ててしまった。○ふげにける我が世のかげ 年老いた自分の身の上の有様。「ふげ」「よ」「かげ」は、下句の「月」の縁語。なお、『聞書集』（九八）や『新古今集』（一五三六）の一部の本では「ふげにけるわが身のかげ」。○こともなく 特に目立つふしもなく。三番判詞の用例に関する「注」「参考」参照。

【考察】八番も左が花の歌、右が月の歌の組み合わせで、西行自身の花あるいは月との関係をとりに上げた歌であるが、前の七番の歌と比べると、現在の西行自身に重点を置いて述懐する態度が見られる作と言えるであろう。

二首のうち左の歌は、『山家集』（七六）に「花の歌あまたよみけるに」の詞書をもつ歌群の中に見え、『西行上人集』（五三）には「花」と題する歌群の中に見え、『千載集』（一〇六六）では「花のうたあまたよみ侍りける時」として出ている。右の歌は、『西行上人集』（五三九）に「述懐の心」と記した歌群の中に見え、『新古今集』（一五三六）には「題しらず」として出ている五首の中の一首である。二首ともに勅撰集では雑歌の部に収められている。

左の歌は、内心を省みて、出家して俗世への執着を捨てたと思う自分に、「花にそむ心」、花への愛着がどうして残ったのであろう、と率直に詠嘆している。この花への愛着を道心に背くものと見る見方を、西行は後に修正して、五番左歌のように、

思ひかへすさとりやけふはなからまし花にそめおく色なかりせばと詠んでいるとも言える。しかしそのことは、矛盾する心をそのまま詠嘆した八番左歌の、歌としての価値にかかわってくることではないと思う。

右の歌は、『聞書集』（九八）の題の「老人述懐」が端的に示すとおり、老いの身について思いにふけるうちに、時がたち、気がつくとも月が傾いていた、と詠んでいる。「ふげにける我が世のかげを思ふまに」

は、下句の「月」の縁語として「ふけ」「よ」「かげ」の語をちりばめて、老いの身の表現に夜がふけて傾く月のイメージを重ねたと見られる。ただし、このような趣向の先例としては、

ありあけの月の光をまつほどにわが世のいたくふけにけるかな
『拾遺集』四三六、藤原仲文

などがある。また言葉の続け方の似た歌に、

ふけにけるわがよの秋ぞあはれなるかたぶく月は又もいでなん
『千載集』二九七、藤原清輔。『清輔集』一五七では二句「わがよのほどぞ」の形で、「月三十五首のなかに」として見える。）の一首があるが、西行の歌との先後関係や直接の関連の有無など明らかでない。

俊成の判詞では、右歌を「心いとをかし」と評価しながらも、左歌を「猶こともなくよろし」として勝と判定する。これは右歌で縁語を用いて老いた身と傾く月とのイメージを重ねた趣向を、「いとをかし」と評価する一方、左歌に趣向の特に目立つところもなく、西行の心がそのまま伝わってくるような特長を認めて、「こともなくよろし」と評し、より高く評価したのであらうと思う。

【備考】八番左歌は『千載集』（一〇六六）に収められ、右歌は『新古今集』（一五三六）に収められている。

九番 左持

一七よしの山こそぞのしをりの道かへてまだみぬかたの花をたづねん

右

一八月をまつたかねの雲は晴れにけり心心ありける（西行上人集）あるべきはつしぐれかな

去年のしをりといひ、たかねの雲といへる、すがたころ、ともにをかし。持とすべし。

【通釈】

九番 左持

一七吉野山、ここは去年、枝を折って目印を付けた道があるが、（今

年は）その道を変えて、まだ見ない方角の花を尋ねよう。

右

一八月が高嶺たかねの上に出るのを待っていると、そのあたりの雲は晴れあがった。情け心のありそうな初時雨だと思う。

（左の歌に）「去年のしをり」と詠み、（右の歌に）「たかねの雲」と詠んでいる、その歌の姿や心は、ともに興味がある。持と判定しよう。

【注】○よしの山 吉野山。今の奈良県中央部の山で、大和の国の歌枕。平安時代中期ごろまでの和歌では、世を逃れて住む山とか雪の降る山として詠まれることが多い一方、その桜をとり上げた歌は、「み吉野のよしの山の桜花白雲とのみ見えまがひつつ」（『後撰集』一一七、よみ人しらず）等の少数の例が見られるにすぎない。吉野山の桜が多く詠まれたのは西行のころからのことになる。○こそ 去年。○しをり 山道などで目印のため木の枝を折って道しるべにすること。○月をまつたかね その上に月が出るのを（自分が）待つ、高い峰。○心あるべきはつしぐれかな 情け心のありそうな初時雨よ、の意として「通釈」に記したが、「心ある」の意味の受けとり方によっては、情趣の分かる心のありそうな初時雨よ、の意に解することもできると思う。この「心あるべき」の解釈については、昔から説のあるところ、右のような(1)心のありそうな、と見る解釈に対して、(2)心があつてほしい、という解釈もある。季吟の『八代集抄』に記す兩説を引くと、「時雨の空の習ひにて、一方晴て猶ふる事あれば、月を待高根の雲は晴しに、又時雨るは心あるべき事と也」とするのは、(2)の解釈と思われ、これに対して「又説、月を待高根の時雨の雲の晴たるは、心なきにあらぬ、初時雨哉と也」とするのは、(1)の解釈をとるかと思われる。近代の説でも、窪田章一郎氏『西行の研究』に「月を隠す高嶺の雲は晴れたのであるが、その雲は麓の里に初時雨を降らせている。そして月をさえぎっているのに対して『心あるべき』と求めているのである」とするのは、(2)の解釈によるものであらう。これに対して、

例えば峯村文人氏校注『新古今和歌集』（日本古典文学全集）に、「晴れた高嶺の雲は初時雨の雲で、初時雨が、月を待つ作者のために、心してくれたらしいと見たのである」とするのは、(1)の解釈によるものである。どちらの解釈によるべきか決めにくい、似た語法をもつ「うぐひすのひとりかへれるおくやまに心あるべきおそぞくらかな」（『秋篠月清集』八二二、良経）の歌なども参考にし、『西行上人集』（二七八）に「心ありけるはつ時雨かな」の形で見えるのに近い内容を表すと考えると、(1)の解釈による方が妥当かと思われる。

【考察】九番も左が花の歌、右が月の歌の組み合わせと見られる（右は本来は時雨の歌であろう）が、この二首は西行の花あるいは月への愛着の心に基づいてのびのびと歌うところが目立つようである。

二首いずれも『西行上人集』にあり、左歌（四一）は「花」と題する歌群の中に、右歌（二七八）は「時雨」と題する三首の中に見える。その外、左歌は『聞書集』（二四〇）に「花の歌どもよみけるに」の詞書で、『新古今集』（八六）でも「花歌とてよみ侍りける」の詞書で収められている。右歌は『新古今集』（五七〇）では「だいしらず」の一首として冬の部に収められている。

左の歌は、吉野山に花を尋ねて来て、去年目印を付けた道を、今度を変えて、まだ見ない方面の花を尋ねよう、と歌う。独り言めいた詠み方であるが、おのずと花の吉野山の広さも表され、その花を求める心が一通りでないことを感じさせる。

右の歌は、そこに月の出るのを待つ高嶺^{たかね}にかかる雲は晴れた、「心あるべき」初時雨よ、と歌う。「心あるべき」の解釈については、(1)心のありそうな、(2)心があってほしい、の両説があるが、『西行上人集』（二七八）に「心ありける」の形で見えるのに近い内容を表すとすれば、(1)によるのが適当かと思われる。すると、高嶺にかかった雲は初時雨の雲で、それが晴れたのは、月の出るのを待つ自分に初時雨が情け心を示してくれたらしい、との気持ちを感じていることになる。月への愛着とともに初時雨への親愛の心も感じられる一首である。

う。

俊成の判詞は、「去年のしをり」「たかねの雲」の歌詞で左右の歌を示し、「すがたごころ、ともにをかし」として持と判定している。左右の歌から特にこれらの歌詞を俊成が挙げた理由を推察すると、「去年のしをり」は、去年作った花見の道しるべを言うので、吉野の花への作者の愛着の並々ではないことを表し、「たかねの雲」は、月がそこに出るのを待つ高嶺のあたりを遮る雲で、それを意識するのは月への作者の待望の強さを表す点を、念頭に置いたと思われる。俊成は、そういう二首の花あるいは月への作者の強い愛着の「心」に注目し、またその心を具体的に表現している歌の「姿」に注目して、「姿心、ともにをかし」と評したのである。

【備考】九番左右の歌は、ともに『新古今集』（八六、五七〇）に収められている。

十番 左 勝

一九吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらん
右

二〇ふりさけし人の心ぞしられける今夜^{こよひ}みかさの月をながめて
こよみかさのおけることは優にきこゆ。ふりさけしといへるはじめの句や如何にぞ聞ゆらん。左の歌こともなくよろし。勝とや申すべからむ。

【通釈】 十番 左 勝

一九吉野山に入つて、このまま出ないでいようと思う私を、花が散つてしまえば（帰ってくるだろう）と、人は待つてゐることであろうか。
右

二〇「あまの原ふりさけ見れば……」と詠んだ人の心が、おのずと分かった、——今夜、三笠山の上に出た月をながめて。

(右の歌の)「こよひ三笠の…」と詠んだ言葉は優雅に感じられる。しかし「ふりさけし」と言った初句は、いかがなものか、疑問があると思う。左の歌は、特に目立つふしもなく詠まれている。よい歌である。左の勝と判定すべきかと思う。

【注】○吉野山 九番の「注」参照。○やがて そのまま。ここでは、花を見に吉野山に入つてそのまま、の意。○ふりさけし人 「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」(『古今集』四〇六)と詠んだ人。この歌の作者は安倍仲麿(六九八?—七七〇)。歌の詞書に「もろこしにて月を見てよみける」とあり、左注に「この歌は、むかし仲麿を、もろこしにも習はしに遣はしたりけるに、あまたの年を経て、え帰りまうで来ざりけるを、この国より又使まかりいたりけるにたぐひて、まうで来なむとて出で立ちけるに、明州といふ所の海辺にて、かの国の人、むまのはなむけしけり。夜になりて、月のいとおもしろくさし出でたりけるを見てよめるとなむ、語り伝ふる」とある。○みかさ 三笠山。奈良市の東部、春日にある山で、ふもとに春日大社がある。○こともなく 三番の「注」「参考」参照。

【考察】左が花の歌、右が月の歌という組み合わせは、一番に始まってこの十番まで続いていると見られるが、この十番の二首は純粋な花の歌や月の歌からは少し外れるところがあるようである。二首には西行が他の「人」の心を思いやつての感懐を歌う点に共通した特徴が認められると思う。

二首はいずれも『山家集』に見えるが、左歌(一〇三六)は雑の部の「題しらず」の歌群の中に置かれ、右歌(四〇七)は秋の部に「春日にまゐりたりけるに、つねよりも月あかくて、あはれなりければ」の詞書で出ている。なお、左歌は『西行上人集』(五四)では「花」と題する歌群の中にあるが、『新古今集』(一六一九)では雑の部に「だいしらず」として収められている。また右歌は『西行上人集』(二六一)には「春日にまゐりて、つねよりも月あかく、哀なりしに、みかさ山を見あげて、かく覚え侍りし」の詞書で出ている。

左の歌で「吉野山やがて出でじと思ふ身を」と言うのは、吉野山に花を見に入つた機会に、そのまま世俗を避けて山にこもろうと思う気持ちを歌つたのであろう。吉野山に世俗を離れて隠れ住みたいという願望は、早く『古今集』よみ人しらずの歌にも、

み吉野の山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ
(九五〇)

などと詠まれている。しかし西行はその下句に「花ちりなばと人や待つらん」と言う。この「人」は親しい人であろう。山を「出でじ」と思う一方、自分を待ってくれる人の気持ちを思う。そういう心の揺れを率直に詠んだ歌で、その点西行らしい作とも言えるであろう。

右の歌は、三笠山の上に出た月を眺めて、「ふりさけし人の心ぞしられける」と歌っている。これも「人の心」を思いやつた歌で、

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも
(『古今集』四〇六)

と詠んだ人(安倍仲麿)の心が分かつたと言う。ただ一首は事柄を素直に述べたにとどまるとも見られるし、初句「ふりさけし」も判詞に指摘されるような問題があるであろう。

俊成の判詞で、右歌の「こよひ三笠の…」を「優にきこゆ」と評価したのは、主に声調に注目したかと思うが、「ふりさけし」を問題としたのは、「ふりさけ見る」の「見る」を省いた表現を、伝統的な用語法を重んじる立場から批判したものであろう。和歌で「ふりさけ」を自立語として用いた例はないわけではないが、例えば「ふりさけて三日月見れば…」(『万葉集』九九九、大伴家持)、「…ふりさけ月を見しぞかなしき」(『浜松中納言物語』五五)のように、後に「見る」を伴うのが伝統的な用語法であつたらしいので、俊成はそれを守る立場から、西行の自由な言葉遣いを批判したと思われる。一方、左歌に対しては「こともなくよろし」と評して勝とする。これは三番、八番で「こともなく」の評語を用いた場合と同様である。

【備考】十番左歌は『新古今集』(一六一九)に収められている。

十一番 左

三 立ちかはる春をしれともみせがほに年をへだつる霞なりけり

右勝

三 岩まどちし水もいまはとけ初めて苔の下水道もとむなり

左歌、すがた詞相叶ひてみゆ。但、みせがほにと云ふ詞は我も人も皆よむ事なり。さはありながら、猶歌合のこと葉にはひかふべきにやあらん。かつは歌のさまによるべし。右の歌、詞をかし。勝と申すべくや。

【通釈】
十一番 左
三 冬に替わつた春、その訪れを知れと見せ顔に、(今朝は)霞が、古い年を隔てた様子でかかっている。

十一番 左

三 岩の間を閉ざしていた水も(立春の)今は解け始めて、苔の下をくぐって行く水は、流れ出す道を求めているようだ。

右勝

左の歌は、その姿と言葉が似合っているように思われる。ただし、「見せ顔に」という言葉は、自他ともに歌に詠んでいる言葉には違いない。けれども、やはり歌合の歌の場合には見合わせるべきであらうかと思う。しかしまた、その歌の様子にもよることである。右の歌は、その言葉が興趣のある作である。勝と判定すべきかと思う。

【注】○立ちかはる春 「たち」は接頭語。冬と交替する春。○みせがほ 見せ顔。見せつける様子。知らせる様子。「みせがほに」の当時の歌の用例には、俊成の「数ならぬ光を空に見せがほに月に宿かす袖の露かな」(『長秋詠藻』五三四)、慈円の「おくまではたづねぬ花を見せがほに風にながる山川の水」(『拾玉集』三四八九)、「卯花のさかりなりとも見せがほに岩に浪こす谷川の水」(『拾玉集』四六二八)、「君が代のくもらぬことを見せがほにことしの秋の月は夜な夜

な」(『拾玉集』四七五〇)、定家の「植ゑおきし昔を人に見せがほに
はるかになびく青柳の糸」(『拾遺愚草』五〇八)、「をさまれる民のく
さばをみせがほになびく田のもの秋の初かぜ」(『拾遺愚草』二二三
九、『新後拾遺集』七二〇)等がある。いずれも歌の第三句に「みせ
がほに」の語を用いている。○年をへだつる霞 古い年を隔てるよう
に立つ霞。○水もいまはとけ初めて 「いま」は、『西行上人集』や
『新古今集』の多くの本には「今朝」とあるが、いずれにしても立春
を迎えて氷が解け始めたというのであろう。この点は、『古今集』に
「春立ちける日よめる」の詞書をもつ貫之の歌「袖ひちてむすびし水
のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」(二)が見え(これは、『礼
記』の「孟春之月、東風解凍」によると見られる)、立春のころに氷
が解け始めるといふ觀念ができていたと思われる。○苔の下水 苔の
下をくぐって行く水。西行の造語か。○道もとむなり 末尾の「なり」
は『平安朝歌合大成』によると「らむ」。『西行上人集』の歌形は伝本
により「らむ」「なり」両様が見られる。『新古今集』では「らむ」と
する本が多い。○すがた詞相叶ひてみゆ 「すがた詞」は『平安朝歌
合大成』によると「姿心」(彰考館蔵枅形本は「こころ姿」)。「姿心相
叶ひてみゆ」とすると、この俊成の批評は、一首で霞を擬人的にとら
え、霞が春の訪れを知らせ顔にかかると詠んだ歌の「姿」が、春を迎
える喜びの「心」にふさわしいと指摘したもののように思われる。そ
れに比べると「すがた詞」の形では、「すがた」と「詞」の関係が(「姿
と「心」の関係よりも)近いだけに、両者が「相叶ひてみゆ」と評す
る必然性が乏しいとも見える。『御裳濯河歌合』の俊成の判詞を見わ
たしても、「姿」「心」を並べて「すがた心ともをかし」(九番判詞)、「
心すがたともをかし」(五番判詞)と評した例はあるが、「すが
た」「詞」を区別した上で並べて同様に評した例は他に見られない。
しかし、「すがた」と「詞」とを明らかに区別していたかどうかは定
かでないが、単に両者を並べて「すがた詞」と記した例なら俊成の判
詞に見られるし、俊成の師の基俊の判詞に「すがた詞ともに得て侍め

り」(『奈良花林院歌合』月三番判詞)という例もあるから、俊成が「すがた詞相叶ひてみゆ」と評しても不自然ではないとも言える。それによれば、春を迎える喜びを、霞が春の訪れを知らせているようだと詠んだ一首の「姿」が、「見せがほに」など、それにふさわしい「詞」で表現されている点を評したと見てよい。

【考察】一番から十番までは、左が花の歌、右が月の歌の組み合わせであったが、この十一番以後は違ってくる。十一番は左右ともに立春の歌と見られる。

二首のうち左の歌は、『山家集』(四)に「たつはるのあしたよみける」の詞書をもつ四首の中の第四首で、『西行上人集』(三)では「初春」と題する歌群の中にある。右の歌は、『西行上人集』(一)に「初春」と題する歌群の第一首で、『新古今集』(七)には「題しらず」として収められている。

二首とも春の訪れを迎える喜びの心をもつと思われるが、自然に接する態度の上で対照的な特色が見られるようで、それは自然を心の色で染めるのと、自然に心を合致させるのとの違いとも言えるのではない。すなわち左の歌は、冬に替わる春の訪れを「見せがほに」、霞が古い年を隔てるようにかかっていると詠んだもので、作者の春を迎える喜びの心を、霞という外部の自然に移し入れ、霞を擬人化して歌っている。それに対して右の歌は、氷が解け、苔の下に動き初めている水の流れを思いやり、表面に見えない春の自然の動きに心をひそめて楽しんでいようなどころがあると思う。

俊成の判詞は、左の歌を「すがた詞相叶ひてみゆ」(『平安朝歌合大成』では「姿心相叶ひてみゆ」。この異同に関するについては「注」で考察した)と一応評価した上で、「みせがほに」という用語を問題にしている。「みせがほに」の語は自他ともに歌に用いてはいるが、一般に歌合の歌の場合は避けるべきであるという趣旨のようである。晴の歌に用いるには概して不適当な言葉と俊成は見ているようである。これは他の俊成の判詞を参照すると、俊成は「みせがほに」に限

らず、「……がほ」という表現を不適当と考えたらしい。この点は『六百番歌合』で、秋下十三番右歌、

長月のけふ九日といひがほに折得て見ゆる白菊の花(四四六、家房)

に対する俊成の判詞に、

いひがほになどぞ、不可_レ庶幾_一詞に侍るべき。

と評し、また同歌合冬上十二番左歌、

白菊の散らぬは残るいろがほに春は風をもうらみけるかな(五〇三、定家)

に対する俊成の判詞に、

色がほにといへる詞、不可_レ庶幾_一にや。

と評していることなどから推測される。

しかし「……がほ」という表現は、俊成以外の中世初期あたりまでの歌人には特に嫌われた形跡がない。稲田利徳氏「西行の和歌の表現

(一)——「しがほ」をめぐる」(『中世文学研究』第七号)は、「……がほ」の用例を博搜された詳細な論であるが、そこに示されるとおり、その用例は『古今集』以下の勅撰集にも少なからず見受けられるし、歌合での用例も俊成を判者とする場合以外には特にとがめられていないようである。ただ、安元元年『右大臣家歌合』初雪五番右の仲綱の歌、

さびしさはかねてふりにし山里にならばしがほなけさの初雪(三〇)

に対する清輔の判詞では、今日文意のたどりにくい部分に関しているが「ならばしがほ」という表現を否定したかと思われる記述があり、清輔の弟でこの歌合に出詠していた重家が「ならばしがほ」という表現に対して「無下にうたてき事也」と手厳しく批判した話が『無名抄』に記されている。けれどもこの場合は「……がほ」という表現が嫌われたと見るのは疑問があり、初雪を題とする歌を、「ならばしがほ」に、慣れた様子で初雪が降ったと詠んだのでは、初雪の新鮮な美

しさを喜ぶ「題の本意」が失われる点が非難されたと見るべきであろうと思う。この点は小論『「ならはし顔」という表現』（「解釈」第四十一巻第八号）に述べたところである。それで俊成が「……がほ」という表現を好ましいものと見なかったのは、俊成独自の語感に基づく見解と考えられる。

右の歌に対しては俊成は「詞をかし」（『平安朝歌合大成』では「心詞をかし」と評して勝としている。この場合俊成の特に注目した「詞」は、一首の下句のそれではなからうか。「苔の下水」というひそやかな水の動きをとらえた表現に、西行の自然への観入の深さを読みとったものであろうと思う。

【備考】十一番右歌は『新古今集』（七）に収められている。

十二番 左勝

二三 色つつむ野べのかすみの下もえて心そむるうぐひすのこゑ

右

二四 とめこかし梅さかりなる我が宿にうときも人はをりにこそよれ

左右の春の歌、ともにえむなるにとりて、右はいますすこしをかし
きさまにはみゆるを、左の歌、ことばはいひとめぬさまながら、
心なほをかし。すこしはまされりとや申すべからむ。

【通釈】

十二番 左勝

二三 春景色を包み隠す野べの霞の、下に草が萌え出て、思いを寄せる、
うぐいすの声よ。

右

二四 尋ねてきなさいよ、梅の花盛りのわたしの家を。人は疎遠にする
のも時節によることだ。

左右の春の歌は、いずれも艶に思われるが、その上で言うと、右
の歌はやや興趣の目立つ姿と見えるのに対して、左の歌は、言葉
としては十分に言い表し切らない姿であるけれど、その心が何と

言っても興趣が深い。比べると左の歌が多少はまさっていると言
うべきかと思う。

【注】○色つつむ野べのかすみ 渡部保氏『西行山家集全注解』に
「いろいろの色を包みかくしている野辺の霞」と訳されるのは、「色」
を色彩と見られたのであろう。ここでは「色」を（色彩も含めて）
「春色」と見て、「春景色」と「通釈」には訳してみた。○下もえて
「下もゆ」は、「下萌ゆ」、地中から草が生え出る意味の語と、「下燃
ゆ」、下で燃える意味から、内心で思いこがれる意味に用いられる語
とがある。その前者を主とし後者も併せた内容と思われる用い方の見
られる歌に、源国信の「春日野のしたもえわたる草の上につれなくみ
ゆる春のあは雪」（『堀河百首』八三、『新古今集』一〇等にも）があ
るが、この場合もそれと似た点がありそうである。ただし「かすみ
の」に続けて萌え出た意味で「下もえて」と置いたとすると、語の続
け方の面で疑問が残る。「下もえて」は、あるいは霞の下の方に草が
萌え出た意味で言われているのであろうか。ただその場合も心中で思
いこがれる意味の「下燃ゆ」も意識されていると見るのが、後の「心
をそむる」（思いを寄せる意味に用いられる）との関連からも適当と
思われる。なお、『御裳濯河歌合』の本文は一般に「下もえて」であ
るが、『平安朝歌合大成』に示される諸本のうち彰考館蔵枅形本等一
部の本文は「下もえき」とある由で、『雲葉集』や『夫木抄』も「下
もえき」の形である。伊藤嘉夫氏校注『山家集』の西行和歌拾遺（一
九四一）で「下もえき」とし、頭注に「萌黄」の語を挙げられるの
は、この系統の本によった解釈と見られる。渡部保氏『西行山家集全
注解』も「野べのかすみの下もえき」として、「野辺の霞の下の方は
若々しい萌黄色であるが」と訳される。「萌黄」の語は和歌に詠まれ
た前例が乏しいと思うが、西行の場合、詠む可能性がないとも言え
れない。○心をそむる 思いをかける。○とめこかし 尋ね来かし。
尋ねてきてくれよ。○我が宿に 『平安朝歌合大成』では「我が宿を」。
『西行上人集』『聞書集』『新古今集』等でも「我が宿を」。○えむな

る艶なる。「艶」は、『古今集』真名序などには浮華の意と思われる用例も見られるが、歌論用語としての一般的な用法では優雅な美しさを中心と言われているようである。「優艶」という熟語が使われることが示すように「優」と内容上似た点もあるが、「艶」は「優」に比べると、より明るく華やかな美を主として用いられているようである。

【考察】十二番は、左が「うぐひす」の歌、右が「梅」の歌である。

一首のうち左の歌は、『夫木抄』(三六七)に「家集、鶯を」とあるが、この歌は西行の家集を含めて本歌合以前の現存歌集の中には見えない。右の歌は、『西行上人集』(三四)に「梅」と題する四首中の一首、『聞書集』(五〇)には「対梅待客」として出ている。『新古今集』(五一)には「題不知」となっている。

左の歌は春の野への情景を詠んでいるが、単純に風景を写した作ではないようである。「野べのかすみの下もえて」のあたりは、「注」でも触れたように、言葉の続け方に多少疑問が残るけれども、「下もえて」は草の萌え出た様子を表すとともに、心中で思いを燃やす意味の「下燃え」も意識させるものであろう。この点は、『堀河百首』で残雪を題とした源国信の歌、

春日野の下もえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪(『堀

河百首』八三、『新古今集』一〇などにも)

の「下もえ」の用法と似たところがあるかと思う。すなわち国信の歌は、草と残雪の様子の表現に「下もえ」と「つれなく」を対応させて恋の見立ての趣向をとっている。西行の歌は機知的な見立てとまでは言えないであろうが、「下もえ」と「心をそむる」を関連させて、恋の気分を伝えていると思われる。そして、このような恋の気分を加えることによって、一首は艶な色調を濃くし、単なる叙景歌とは異なる趣をもつものになっていると思う。

右の歌は対詠の形をとるもので、梅の花盛りの我が家を尋ねるよう人に誘う心を、端的に畳みかけるような調子で歌っている。下句に「うときも人はをりにこそよれ」と言って、勧誘の趣旨を徹底させよ

うとしたところに、飄逸な面白さが感じられるようである。

俊成の判詞は、「左右の春の歌、ともに艶」であるとした上で、左右それぞれの歌の特徴に触れ、右の歌は「いますこしをかしきさま」に見えるが、これに対する左の歌は、

ことばは言ひとめぬさまながら、心なほをかし。

と評して勝と判定する。「ことばは言ひとめぬさま」は、左歌が言葉の面で十分に言い尽くしていない点を、短所として挙げた形になっている。しかし大きな欠点と俊成は見なかったらしいことは、続けて左歌の長所として「心なほをかし」と評して勝としていることから明らかである。「心なほをかし」と評したのは、左歌の春の野への情景の表現に恋の気分を加えた着想を、興味あるものとして評価したかと思われる。右歌に対しても「をかし」の評語を用いているが、右歌を「をかしきさま」に見えると評したのは、梅の花盛りの我が家を訪ねよ、疎遠にするのも時節による、という呼び掛けを面白いと見たのであろう。けれども、このような言葉の上に面白さが直接読み取られる「さま」の右歌よりも、言葉は言い尽くしていない「さま」であって、言葉の奥の「心」に興味の感じられる左歌に、俊成はより惹かれるところがあったのであろう。

【備考】十二番右歌は『新古今集』(五一)に収められている。

十三番 左

三五山がつかた岡かけてしむるしむるいはの山家集のさかひにたてる玉みゆる山家集のを柳

右勝

三六ふりつみしたかねのみ雪とけにけり清滝河の水のしらなみ

左歌、さる事ありとみる心ちしてめづらしきさまなり。すゑの句のをの字やすこし如何いかが(大感)。さもよみて待るか待るとよ(大感)とよ。右歌、すがたいとおもしろくみゆ。勝と申すべし。

【通釈】

十三番 左

三五 山家の人の、片岡にかけて住まいとする野の、境に立っている美しい柳よ。

右聯

二六 降り積もった高嶺の雪が解けたのだ、清滝川の水が増し白波を立てている。

左の歌は、なるほど、そういう事があると、情景を眼前に見るような気がして、目新しい様子の作である。ただ、下の句に使われた「玉のを柳」の「を」の字は、少しどうかと思われる。そのように歌に詠んでいる（証拠がある）でしようか。右の歌は、その姿が大層面白く思われる。勝とすべきであろう。

【注】○山がつ 山中で生活する身分の低い人。獵師、木こりなど。○かた岡 片丘。一方の斜面が、他の一方の斜面よりも、ゆるやかに傾斜した丘。○しむるの 占むる野。自分のものとして占有する野。

『山家集』(五二)には「しむるいほ」とあり、その場合の「いほ」は庵で、粗末な家を言ったことになろう。○玉のを柳 美しい柳。本来「玉の」は後の語に示すものを美しいと見て褒める気持ちで添える語、「を」は語調を和らげるために添える接頭語であろう。しかし、「玉柳」という用例は催馬楽の「高砂」にも見えるし、「鶯の糸によるてふ玉柳吹きなみだりそ春の山風」(『後撰集』一三二、よみ人しらず)とも詠まれているが、「玉のを柳」あるいは「を柳」の用例は八代集の中に見られない。「玉のを柳」の西行以前の用例かと思われる歌には、『月詣集』(八三)に「権中納言俊忠卿家歌合に、かきの柳といへることをよめる」の詞書で出ている源仲政の歌、「あたらしやしづの柴垣かきつくるたよりにたてる玉のをやなぎ」がある程度にすぎない。ただ西行が詠んだころから他の歌人たちに詠まれた形跡がある。そして後の用例になるが、『順徳院御百首』(七)に「あさみどり霞の衣吹くかぜにはつるる糸や玉のをやなぎ」の一首が見え、これについての定家の判詞に「霞の衣風に乱れて、柳の糸玉をつらぬく心、見所おほく候歟」とあるような点を参照すると、「玉のを柳」は、玉

の緒柳(玉を貫く緒と見える枝をもつ柳)としての意識を伴っていた可能性が考えられる。○清滝河 今の京都市西北部、梅尾・高雄などを経て保津川に注ぐ川。○さもよみて侍るかとは 分かりにくい語であるが、「とよ」は念を押す気持ち、または軽い感動の気持ちで添えたもので、「さもよみて侍るか」に意味の中心があると見られる。そしてこれは、「すゑの句のをの字やすし如何」という「玉のを柳」の「を」の用い方を問題視した言葉に続けて言われている点から考えて、そのように「を」を用いて「玉のを柳」と歌に詠んでいる(証拠がある)でしようか、の意と見たいと思う。なお、『平安朝歌合大成』では「さもよみて侍るとよ」と「か」を欠く本文を挙げるが、同書の本文校異によれば「か」をもつ本文も彰考館蔵枳形本等少なくともいようである。

【考察】十三番は、左が山家の「柳」の歌で、柳は春の歌材に限定されているわけではないが、春の代表的景物の一つで、『堀河百首』でも春の題の中に挙げられている。右は早春の情景を詠み、『西行上人集』によれば「初春」の歌とされる。

二首のうち左の歌は、『山家集』(五二)に「山家柳」、『西行上人集』(二六)にも「山家柳を」として見えている。『新古今集』(一六七七)では「題しらず」の中の一詩である。右の歌は『西行上人集』(二二)に「初春」と題する歌群の中に見え、『新古今集』(二七)では「春歌」として出ている。

左の歌は、実景に即して詠まれた感があり、山里の風景の中に春の柳をとらえている。「山がつ」の住居の様子を地形上から示し、そのひなびた風景の中で、際立って優雅に見える柳に焦点を当てている。

右の歌は、高嶺の雪が解けて川の水が白波を立てて流れる様子をとらえている。これも実景に即した歌と見られるが、上の句の高嶺の雪解けの様子は、下の句の川に白波の立つ様子から想像されたものである。しかし、まず高嶺の雪解けのことから歌い出しているために、広い空間にわたる早春の自然の力強い動きが印象づけられるように思

う。

俊成の判詞は、左歌については、「さる事ありとみる心ちしてめづらしきさま」と評する。従来あまりとり上げられなかった山里の風景を眼前に見るように描き出した新鮮さを評価したと見られる。しかしその一方で、「玉のを柳」の「を」の字の用い方を問題視する。これは「注」に記したように、「玉のを柳」（または「を柳」）の用例が八代集に見当たらず、この西行の歌以前の用例かと思われる歌としては、権中納言俊忠卿家歌合に源仲政が詠んだと『月詣集』に伝える、「あたらしやしづの柴垣かきつくるたよりにたてる玉のをやなぎ」（八三）の一首が見られる程度にすぎないので、俊成はそういう伝統的な用例の乏しい「玉のを柳」の「を」の用法を問題にしているのであろう。この点を裏づける記事が『順徳院御百首』の奥に見える。それによれば、定家は「玉緒柳」の語を挙げて次のように注している。

西行法師のさかひに立ると詠候。此歌宜候か。入千載集哉之由申候時、釈阿、事体雖可然、此七之字始詠候歟、押事歟之由申候。（以下略。『続群書類従』三八六による）

すなわち、この西行の一首を『千載集』に入れるかという定家の問いに対して、釈阿（俊成）は、「玉のを柳」という語は前例のない表現を作者がしたもので、「押事歟」——無理な言い方かと思う、と答えている。

右歌については、俊成は「すがたいとおもしろくみゆ」と評して勝としていいる。「おもしろし」という評語は、趣向が目新しく興味をひくとの意味で用いられる伝統がある。俊成もその伝統に従って評しているとすれば、右歌のどこに趣向の目新しさが見いだされているのであろうか。この問題を考える上で参考になるかと思うのは、土芳の『三冊子』に芭蕉の見解として記す次の一節である。

けり留りは至って詞強し。かり初にいひ出すにあらざ。「ふりつみし高根の深雪とけにけり」といふも、至りてつよくいひはなして、其響に應じて「清滝川の鳴り上る水のしら浪」といひかけ

て、けしきを顯す也。（『日本古典文学大系 連歌論集俳論集』による）

この一節などを参考にして右歌を見ると、「ふりつみしたかねのみ雪とけにけり」と感動を一息に言い切り、その言葉の勢いに応じて「清滝河の水のしらなみ」と奔流の様子を写して生命力を躍動させた、連句のような呼吸による上下の句の仕立て方に、俊成は新鮮なものを感じ、「姿いとおもしろく見ゆ」と評したのではないかと思う。

【参考】○「おもしろし」について

「おもしろし」という評語は、歌論書、判詞を通じて古来かなり多く用いられているので、ここにその用例を一一挙げることは省略する。（小著『定家十体の研究』第七章面白様のところに用例を挙げて考察した。）その基本的な意味は、趣向が目新しく興味があることかと思うが、従来は知的な趣向の面白さが目立った歌に対して言われた評語であったのを、俊成はこの『御裳濯河歌合』の西行の歌に対する判詞のあたりから後、趣向が一首の特長を生かす要素として働き、その点で新鮮な興味をもたらすと見られる歌について、「おもしろし」と評するようになっていいると思う。

このことを多少の具体的な用例によって見ると、公任の『和歌九品』では、上品下と中品上の歌の説明に「おもしろし」の語を用いており、上品下の歌については、

心ふかからねどもおもしろき所あるなり。

と説明し、その例歌として、

世の中いたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

外一首を挙げる。中品上の歌については、

心詞とどこほらずして面白きなり。

と説明し、その例歌として、

立ちとまり見てを渡らんもみち葉は雨と降るとも水はまさらじ

外一首を挙げる。これらの歌は、上品上・上品中の「余りの心」があると説明される歌に次ぐ価値を認められているが、例歌は知的な趣向

が目立つ作と言えるであろう。

歌合判詞の用例でも同様で、『御裳濯河歌合』に近い年代のものとして文治二年十月二十二日の歌合（衆議判）の例を引くと、その紅葉二番左歌、

いはねどもうらごの山はしるきかなまつ下葉したばよりもみぢそむれば
に対する判詞に、

左歌、おもしろし、と人々申さる。まことによく思ひよられたり。

とあるのは、信濃の国の歌枕「うらごの山」に衣服の色の「裏濃」を掛けた一首の知的な趣向を「おもしろし」と評価したものであろう。

俊成の判詞でも、早い時期の、嘉応二年『建春門院北面歌合』では、その臨期違約恋十番左歌、

てる月のおぼろけならず契りしは空だのめともけふこそはしれ
に対して、

左歌、すがた詞おもしろく、歌合の歌といひつべし。

と評している。これは、「おぼろけならず契りし」の「おぼろけならず」を言うのに「てる月の」と初めに置き、その「月」の縁で「空だのめ」の語を用いるという、一首の用語上の趣向を特徴と認めて、「すがた詞おもしろく」と評価したのであろう。この場合俊成は、従来の「おもしろし」と評する際の観点を継承していると思われる。

それが『御裳濯河歌合』十三番右歌に対する俊成の判詞では、知的な趣向自体が特に目立つとは言えない歌に対して「すがたとおもしろくみゆ」と評していることになる。このような「おもしろし」の用い方を、以後俊成は基本的にとり続けているようである。そういう例を挙げてみると、『六百番歌合』春下七番左歌、

袖の雪空ふく風も一つにて花にはへる志賀の山ごえ
に対する判詞に、

この志賀の山ごえはおもしろくやあらんときこえ侍るにや。
と俊成は記している。この左歌は定家の作で、まず「袖の雪」は語の

続け方が新しいが、それを「空吹く風も一つにて」と広い空間につながらせ、一面の「花にはへる」美の世界を表現する。ここには単なる知的な趣向とは違った巧みな趣向がうかがわれると思う。このような趣向によって、一首は志賀の山越えに落花を結びつけた先行歌とは異なる、独自の新鮮な印象や興趣を感じさせる作品になり得たと言えるであろう。俊成が「おもしろくやあらん」云々と評したのは、そういう点に注目してのことであつたかと思う。

このように評語「おもしろし」の内容を変質させると、それに伴う価値意識も従来よりも高くなると思われる。俊成の判詞の「おもしろし」の用例は十三例があるが、その内左右の二首を共に「おもしろし」とした二例と、判詞は俊成でも勝負の判定は余人が行った一例とを除き、十例について「おもしろし」とした歌の勝負の判定を見るに、勝八、持二である。俊成に至る前の歌合判詞の「おもしろし」とした二例の内、左右二首を「おもしろし」とした二例と、「おもしろし」と覚ゆる事もみえず」とした一例とを除き、五例について「おもしろし」とした歌の判定状況を見ると、勝がなく、持三、負二であるから、その違いは明らかであろう。（用例は前記小著参照）

【備考】十三番左右の歌は、ともに『新古今集』（一六七七、二七）に収められている。

十四番 左持

ニセつくづく物思ひをればほととぎすころにあまる声聞ゆなり

右

ニハうき世思ふ我かはあやな郭公あはれこもれる忍ねのこゑ

兩首の郭公、ともに心こゝろこもれり（大感）。よき持なり。

【通釈】

十四番 左持

ニセしみじみと物思ひをしている折から、ほととぎすの、やるせない
思いを誘う声が聞こえる。

右

二八今さら俗世を恋しがる自分ではないのに、分かっていないね、ほととぎす、お前はあわれのこもった忍び音で鳴くけれど……

左右二首のほととぎすの歌は、ともに深い感動がこめられている。よい歌の組み合わせで、持と判定する。

【注】○ほととぎす カッコウに似た鳥であるが小形で、全長約二八センチメートル。日本各地に五月ごろ渡来し、八、九月ごろ南方へ去る。古来夏の代表的な鳥として特に声が愛された。漢字表記は、右歌に記された郭公のほか、時鳥、杜鵑、子規、不如帰なども用いられる。○ころにあまる 自分の心だけで処理しきれない。思い余る。

○うき世 俗世。「憂き世」すなわち仏教的世界からみていとうべき俗世との意をこめて言われる。○あやな 筋が通らない、理屈に合わない意の形容詞「あやなし」の語幹を、感動表現として用いたもの。

○あはれこもれる 『西行上人集』(一四九)では「あはれこもる」。

○忍ね 忍び音。ここでは四月ごろのホトトギスの声を、本格的に鳴く前の、潜めた声としてとらえた語。○心こもれり 後記「参考」の項参照。○よき持 番えられた二首がともによい歌で、優劣のないこと。

【考察】十四番は、左右ともに郭公の歌である。

二首のうち左の歌は、これ以前の歌集に見えないので、西行晩年の作かと思われる。右の歌は、『西行上人集』(一四九)で「郭公」と題する歌群の中に見える。

二首とも、ほととぎすの声を心に痛切に響く声としてとらえているが、それを左の歌では「心に余る声」として聞いた時の感動をそのまま詠んだと見えるのに対して、右の歌では「あはれこもれる忍び音の声」と感じる一方、その声によって「うき世思ふ我かはあやな」と、郭公に反発する心を加えて詠んでいる。「我かはあやな」は、『古今集』の次の歌に見え、そこから影響を受けたところがあるであろう。

人目もる我かはあやな花すすきなどかほにいでて恋ひずしもあら

む(五四九、よみ人しらす)

調子の上でも、左歌は句切れなく単純に自然に詠まれているのに対して、右歌は「……我かは、あやな、郭公、……」と切れ、これは『古今集』の表現によったものだが、より強い感情の揺れを示している。こういう相違は、制作時期の上で、西行晩年の作とそれ以前の時期の作との相違を反映している面もあるかもしれない。

俊成の判詞は、二首を「ともに心こもれり」と評して「よき持」と判定している。

【参考】○「心こもる」について

「心こもる」は、俊成が使い始めた独自の評語ではないかと思う。

俊成の評語「心こもる」の早い時期の用例は、承安二年『広田社歌合』に四例が見える。次に関連する歌と判詞の一部を摘記する。(『新編国歌大観』により、適宜漢字を当てた。)

(1)社頭雪二番右

しめのうちに夜をとほすかな下消えぬ頭の雪をうちはらひつつ

右、頭の雪をうちはらひつつ、といへる心、いとあはれには侍るを、これはまことの雪やすくなからんとぞみえ侍れど、下消えぬとおけることばに心こもりて、ふる雪をはらへるなるべしと、社頭に通夜せる心をかしくも侍れど、

(2)海上眺望九番右

ながめやる船降はあともなかりけりうらみや深き松浦佐用姫

うらみや深き松浦佐用姫といへるや、すこし腰はなれたる心ちし侍れど、よく思ひとけば、ことばかすかに、心こもりてなほをかしく侍るべし。

(3)述懐三番右

とにかくにあはれ昔にあらませばと思ふ事のみ数つもりつつ

右、心こもりて、なにとなくあはれにもきこえ侍るものかな

(4)述懐十番左

身のほどの思ふばかりは言はれねど知るらんものを神の心に

左歌、ことば外にあらはさざれど、心内にこもりて優にきこえ侍り。

以上の「心こもる」の用例のうち、(4)の場合は「ことば外にあらはさざれど」に対応する形で「心内にこもりて」と言っているの、言葉に十分に表現されていないが、何らかの心が奥に深く感じとられる場合に、「心こもる」と言うのであろうと考えられる。この点は(2)に「ことばかすかに、心こもりて」と言っている場合についても同様に考えられるであろう。そして四つの「心こもりて」は、それぞれ評の対象とする歌について見ると、その「心」は感動を中心と言われたものと見られそうである。また「心こもりて」は、それに続けて「をかし」とか「あはれに」とか「優に」とか言われているから、相応の価値が認められる状態と思われる。(ちなみに「心こもりて」と評せられた歌の勝負の判定は、(1)(2)(3)の場合は持、(4)の場合は勝となっている。)

要するに、歌の言葉からは十分にとらえられないが、何らかの感動が奥に深く感じられ、そこに価値が認められる場合に、俊成の用いた評語が、「心こもる」であろう。

『御裳濯河歌合』における俊成の「心こもる」の用例は、十四番の外に、二十三番に見られ、それは右歌、

枯野うづむ雪に心をしかすればあだちの原に雉(たつなり大成)なくなり
に対して、

右は、心こもりて姿すがただけあり。

と評したものである。二例とも簡単な評語であるが、対象とした歌を併せて考えると、『広田社歌合』の場合と同様に見てよいかと思う。

俊成の「心こもる」の用例は『六百番歌合』にも見られる。所在箇所のみ挙げておくと、夏下二十四番、秋中七番、秋下十一番である。

なお、後の心敬の『ささめごと』には、定家の稽古論として引用した中に、「有心体として心こもりたる体」と記している。

十五番 左

二九うぐひすの古巢よりたつ時鳥あめよりもこきこゑの色かな

右勝

三〇きかずともこをせにせむ郭公山田のはらの杉のむら立

ふるき歌合の例は、花をたづぬるにも見たるをまさるとし、郭公をまつにも聞くを猶勝とする事なれど、これはただ歌の勝劣を申すべきなり。藍よりもこき心、をかしくはきこえながら、又をりをり人よめる事なるべし。山田のはらのといへる、凡俗及びがたきに似たり。勝と申すべし。

【通釈】

十五番 左

二九うぐひすの古巢ふるきから飛び立つ時鳥ときどりは、藍あじより青い——育ての親(のうぐいす)にも勝る、その声の響きよ。

右勝

三〇もしその声を聞けなくても、こを聞く所に決めよう、郭公よ、

——山田の原の、杉の深い木立を。

昔の歌合の例では、花を尋ねる歌の場合も花を見た歌の方を勝るとし、郭公を待つ歌の場合もその声を聞く歌の方をやはり勝ちとするのであるが、ここでは歌としての優劣についてのみ言おうと思う。(左の歌の)藍よりも濃いとす趣向は面白いとは思われるけれども、また時々人が詠んだことに属する。(右の歌で)「山田の原の」と詠んでいるのは、凡俗の者には及びにくいように思われる。(右の)勝と判定すべきであろう。

【注】〇うぐひすの古巢よりたつ時鳥 時鳥はみずから巢を作ることせず、うぐいす等の巢に産卵し、子を仮親に育てさせる。『万葉集』巻九の「詠三衢公鳥一首」には、「うぐひすの 生卵の中に ほととぎす ひとり生まれて なが父に 似ては鳴かず なが母に 似ては鳴かず (中略) ひねもすに 鳴けど聞きよし (下略)」(二七五九—高橋虫麻呂)と歌われている。〇あめよりもこきこゑの色 藍より

も濃き声の色。「藍よりも濃き」は、「青は藍より出でて藍より青し」(出典は『荀子』勸学。「出藍の誉れ」と言われ、教えを受けた者が教えた者より優れている意味に用いられる)によった表現。○きかすともここをせにせむ(ほととぎすの声を)実際に聞けなくても、ここを聞く場所にしよう。「せに」の「せ」は、物事を行う場所。○山田のはら伊勢神宮外宮付近の原。『八雲御抄』巻五名所部十「原」の中に、「や、まだの(神宮也。西行 外宮の御在所也)」とある。○杉のむら立「むら立」は群立ち。杉の木が群がり立つところ。○郭公をまつにも聞くを猶勝とする事なれど 郭公を待つ歌の場合にも、その声を聞いたと詠んだ歌の方を(そうでない歌に対して)やはり勝と判定するのであるが。これに該当する前例に、寛治八年『高陽院七番歌合』郭公三番がある。左が「夜をかきね待兼山のほととぎす雲のよそにて一声ぞ聞く」(周防内侍)、右が「明るるまで待兼山のほととぎす今日も聞かや暮れむとすらん」(頭綱朝臣)で、経信の判詞は、「この歌どもは、ただおなじやうにのみ聞こえはべるを、左は、ほととぎす聞きたる歌なり。右のは、まだ聞かねば、さきさきも聞きたるをぞ、まさるとは申すめる」とあって、左を勝としている。ただし、この判定に対して、清輔は『袋草紙』(下巻)で、それが必ずしも先例とは言えないことを『在民部卿家歌合』の場合を挙げて指摘している。「予今案之、在納言家歌合に、合と聞歌、不聞歌、或勝或持也」というので、この点は『在民部卿家歌合』について見ると清輔の指摘に根拠のあることが知られる。しかし、この行平家で催された歌合は時代が遠く隔っており、俊成は視野に入れなかったと思われる。

【考察】十五番は、左右ともに、ほととぎすの歌で、この点は前の十四番と同様である。

二首はいずれも『西行上人集』にあり、左歌(一四七)も右歌(一四一)も「郭公」と題する歌群の中に見える。『聞書集』中の左歌(七八)、『残集』中の右歌(六)も題は同じく「郭公」である。ただ『新古今集』中の右歌(二二七)は「題しらず」となっている。

左の歌は、ほととぎすの声のよさを、育ての親のうぐいすの声の美しさと比較し、その優れていることを「青ハ藍ヨリ出デテ藍ヨリ青シ」の語を借りて表現している。この場合、ほととぎすの声を育ての親のうぐいすの声と比較してよい声とする点は、「注」に挙げたように『万葉集』の歌(二七五九)に前例がある。また「藍ヨリ青シ」を詠みこむことは、『散木奇歌集』の次の歌にすでに見られる。

あふよりもあをくそめなす色もあればちとせの宿に万代をませ
(七一一)

ただ、これは詞書に「小野大僧都証観白河の房にわたりて祝ひの心をよめる」とあり、ほととぎすに関する歌ではない。したがって、ほととぎすの声を「藍よりも濃き声の色」ととらえた点には西行の独自性が認められ、そこに西行独自の感性の反映が見られるなら、それは一首の特長と言えるであろう。

右の歌は、ほととぎすを聞く場所を、「ここ」「山田のはらの杉のむら立」に決めよう、という思いを、率直に詠んでいる。「山田の原」は伊勢神宮外宮付近の地であるが、ここを詠んだ歌は、西行よりも前には、『源順集』に次の歌が見える程度である。

神のます山田の原のつるのこはかへるよりこそ千代はかぞへめ
(二七二)

これは詞書に「伊勢親子齋内親王の群行ののち、かへるあしたに、齋王の御前にて饗禄等たまふに、男女うたよむにたてまつる」とあるように、齋宮の伊勢到着後、京へ帰る折の儀礼的な祝いの歌である。これに比べると、西行の歌は独詠的な性質をもつ。「山田の原の杉のむら立」をとり上げたのは、晩年伊勢に住んで神宮を崇敬した西行の心に基づき、実地に即した直感であろう。そして「ここをせにせむ」(ここを、ほととぎすを聞く場所に決めよう)の前に、特に「きかすとも」(たといその声を聞くことができなくても)と言っているのは、この場所での西行の独り言をそのまま記したような趣も感じられる。

俊成の判詞は、左歌で「藍よりも濃き」とするところえ方は面白い

が、前例があると言い、右歌で「山田の原」を詠んだのを「凡俗及びがたきに似たり」と評して勝と判定している。神宮のある神聖な場所をとり上げた西行の敬虔な心を認め、特にその場所への強い思いを率直に表現した点を高く評価したのであらうと思う。

【備考】十五番右歌は『新古今集』(二二七)に収められている。

十六番 左勝

三 ほととぎすふかき峰より出でにけりと山のすそにこゑの落ちくる

右

三 五月雨の晴まも見えぬ雲路より山時鳥なきてすぐなり

右歌、難とすべき所なく、たけたかくきこゆ。左歌、郭公深山のみねより出でて、と山のすそにこゑのおちくらん程、今まさしく聞く心ちして、めづらしくみゆ。左勝と申し侍らん。

【通釈】

十六番 左勝

三 ほととぎすが、深い山の峰から出てきたのだな。この里近い山の

ふもとに、声が高みから響いてくる……

右

三 五月雨の晴れ間も見えない、雲の閉ざした中を、山ほととぎすが鳴いて飛び過ぎていくようだ。

右の歌は、欠点とすべきところがなく、格調の高い作と思われる。左の歌は、ほととぎすが深い山の峰から出て、里近い山のふもとに声が高みから響いてくる様子が、今実際に聞くように感じられて、新鮮に受けとられる。左の勝と判定しようと思えます。

【注】○と山のすそ 「と山」は外山で、深山に對する。人里に近い山のふもと。○こゑの落ちくる 声が高いところから急に響いてくる様子の表現であらう。○雲路より 雲の中(の通路)を通って。「雲路」は、雲の中の通路で、鳥などが通ると考えられた。「より」は、ここでは經由する場所を示す用法。○山ほととぎす ほととぎすを、

本来山にいる鳥(季節になると山から里へ出てくる鳥)と見たところから言われる語。○難とすべき所 欠点とすべきところ。○たけたかく 格調が高く。なお「参考」で触れる。

【考察】十六番も、左右ともに、ほととぎすの歌である。

二首のうち左の歌は、『西行上人集』(一五一)に「郭公」と題する歌群の中に見える。ただ『新古今集』(二二八)では「題しらず」となっている。右の歌は、『山家集』(一九八)に「雨中郭公」として見え、『西行上人集』(一三九)にも「雨中の郭公を」とある。

左の歌は、「外山のすそ」にほととぎすの声が開こえたことから、ほととぎすが「深き峰」から出てきたなど、感じたままを詠んでいるように思われるが、「こゑの落ちくる」という表現は、ほととぎすの声が高い位置から、急に、強く響いてきた様子を、適確に伝えたものと言えるであらう。

右の歌は、五月雨の雲に閉ざされた空を、ほととぎすが貫くように鳴き過ぎる様子を、そのまま単純な形で一息に詠んでいる。

俊成の判詞は、右歌を問題点もなく「たけたかくきこゆ」と評するが、左歌の、ほととぎすが深山から出て、里近い山のふもとにその声が「落ちくる」様子は「今まさしく聞く心ちして、めづらしくみゆ」と評し、左の勝と判定している。

俊成はここで左右どちらの歌にも短所を指摘していないので、「たけたかし」よりも「めづらし」の方に高い価値を置いて判定したようにも見えるが、これはやはり、そう一般的に割り切るべきではないのであらう。「たけたかし」という評語を俊成はこの歌合三審判詞にも用いているが、そこで「たけたかくみゆ」と評した歌は勝と判定している。(ただしその場合は番えられた歌に長所とともに問題点のあることを言っている。)一方、「めづらし」という評語は俊成はこの歌合十三審判詞にも用いているが、そこで

さる事ありと見る心ちして、めづらしきさまなり。

と評した歌は負になっている。(ただしその場合はその歌に別の問題

点があることを言っている。そのようなことを参照すると、俊成は「たけたかし」とか「めづらし」とかの評語を歌の特長を示すのに用いているが、いずれかの評語により高い価値を置くのではなく、判定はあくまで歌に即して総合的に行っているのである。それでこの十六番の場合、右歌も「たけたかく」思われるよい歌に違いないが、左歌でほととぎすの「声の落ちくる」様子が生き生きと表現され「めづらしく」感じられる点が際立って優れているために、左を相対的に勝としたのであろうと思う。

【参考】○「たけたかし」について

俊成が『御裳濯河歌合』三番判詞で「たけたかく見ゆ」の語を用いて評したのは、次の歌であった。

おしなべて花のさかりに成りにけり山のはごとにかかる白雲
これらの「たけたかし」と批評される歌に共通する特徴は、こせこせせず、のびやかで簡素な表現のうちに、精神的に張りつめた高いものが感じられる点であろう。

「たけたかし」とほぼ同様の内容を表すと思われる評語に、「たけあり」や、歌の姿(さま)に関して言われる「たかし」などがある。これらの評語の歌合判詞での用例は、俊成の師の基俊あたりから見られ、基俊の用例と思われるもの四例について見ると、これらの評語の用いられた歌の勝負の判定は、勝三、持一である。俊成の場合は、これらの評語の判詞の用例は二十四例であるが、この内歌合の歌に対する評語でない一例と、判定が第三者の意見によることになった一例とを省き、二十二例について、これらの評語の用いられた歌の勝負の判定状況を見ると、勝十二、持六、負四である。全体として勝率はかなり高い。これは俊成が「たけたかし」の類の語の示す特長を、基俊の観点を受けて相当重んじていたことを示すように思われる。しかし「たけたかし」の類の評語を用いた歌も、総合的に判定した結果、負になる場合も幾つかあったことが知られる。

【備考】十六番左歌は『新古今集』(二二八)に収められている。

十七番 左勝

三三 あはれいかに草葉の露のこぼらん秋風たちぬみや木ののはら

右

三四 七夕のけさのわかれの涙をばしほりやかぬるあまのはごろも

左右の初秋の歌、ともにえんなるべし。但、右は、か様の心ききなれたるべし。左の、宮木ののはら思ひやれる心、猶をかしくきこゆ。勝と申すべくや。

【通釈】

十七番 左勝

三三 ああ、どんなに草葉の露がこぼれているであろう、——秋風が吹き始めた、——あの宮城野の原に。

右

三四 七夕の織姫が、今朝の別れの悲しさに、涙を絞り尽くせないでいることか、——その天の羽衣の袖に。

左右の初秋の歌は、ともに艶な作と言えるであろう。ただし、右の歌は、このような内容はすでに聞き慣れているものである。

左の歌の、宮城野の原の様子を思いやった心が、やはり興趣があると思われる。左の勝と言うべきかと思う。

【注】○みや木野 宮城野。今の仙台市東方にあった野。みちのくの歌枕で、特に露や萩の名所として知られた。○七夕 「たなばた」は、本来棚機で、機を織る機械、また、はたを織ることを意味し、さらに、はたを織る女性を言ったようである。それが古代中国の説話と結びつき、陰暦七月七日に天の川の兩岸の織女星と牽牛星とが年に一度会うという七夕説話の織女を言い、またその時の行事などもそう呼ばれることになった。○あまのはごろも 天の羽衣。天人の衣裳。○えん 艶。優雅な美しさを中心に言われる。十二番の「注」で触れた。

【考察】十七番は、左が「秋風」の「立つ」歌、右が「七夕」の歌で、

ともに初秋の季節の歌である。

二首のうち左の歌は、『西行上人集』(一七〇)では「秋風」と題されている。新古今集(三〇〇)では「題しらず」である。右の歌は、これ以前の歌集に見えない。

左の歌は、宮城野に露の散りこぼれる様子を思いやった作である。

『古今集』の

みさぶらひみ笠と申せ宮木野の木の露は雨にまされり(一〇九

一、東歌)

が本歌(日本古典文学大系『新古今和歌集』など)または参考歌(新日本古典文学大系『新古今和歌集』など)として挙げられるが、これは宮城野を露の名所にした源に位置する有名な歌とはいえず、本歌とするほどの関係はなさそうである。西行の心にあつた可能性が考えられる点で参考歌と言える程度のものではなからうか。

この左歌では西行は、吹き始めた秋風から曾遊の地である宮城野に専ら思いをはせ、秋風を受けて原一帯の草葉の露がきらめきこぼれる様子を思い浮かべていると思われる。端的な表現のようで情景が印象的なのは、思い入れが深く純粋なためであろう。ただし、一首は作者が宮城野について古里の様子を思った作と見る解釈が、早く中世のころに行われている。

この草葉の露といへるは、古郷の草葉の露の事也。宮城野の萩の露さとこぼるるを見て、この面白き露さへ哀れに見ゆるほどに、

古郷の草葉の露さぞといへり。(『新古今和歌集聞書』)

こういう解釈が生まれたのは、「秋風たちぬ宮城野の原」が、眼前の景としての印象が強いことによるのであろう。しかし「古郷」を思いやったという解釈は根拠がなく、無理と思われる。なお、そのような誤解を避けるために、近世の宣長は次のように注意している。

結句を初句の上へまはして、みやぎののはらは、あはれいかに云

云と心得べし。(『美濃の家づと』)

確かに、句をその順序に置き換えれば、宮城野はどんなに草葉の露が

こぼれているであろうと、秋風を感じた作者が想像していることが明白に知られると思う。ただ、そういう句の順序変更は、解釈の筋道を通す便宜上肯定されるけれども、一首を鑑賞する上ではイメージを損なう恐れがあるかもしれない。西行が宮城野以外の場所で秋風の立つのを感じて詠んだのが事実でも、西行の心には、広い宮城野に秋風が立ち、原一帯の草葉の露がこぼれ散る風景があつたと思う。「秋風たちぬ」を「宮城野の原」から切り離すと、宮城野の風景は広さを失って平凡になりはしないか。一首の句の順序はやはり必然性があるようにも思われる。

右の歌は、七夕説話の織姫が、年に一度の逢う瀬の翌朝、別れの悲しみに泣き濡れる様子を想像した作である。左右ともに美しい歌と言えるであろう。

俊成の判詞は、左右の初秋の歌がともに「艶」であるとした上で、右の歌の発想は前例があり聞き慣れたところがある点を指摘し、左の歌の「宮城野の原」を思いやった心を評価して、左の勝としている。

右の歌の発想が聞き慣れたところがあると指摘したのは、七夕説話によって織女星と牽牛星とが別れに袖を濡らすという発想の歌の先例が少なくないことを言ったのであろう。

今はとてわかるる時は天の河わたらぬさきに袖ぞひちぬる(『古今集一八二、源宗于「七日の夜のあかつきに、よめる」)

これは彦星の立場で詠んだものであるが、次の歌などは天の羽衣の袖を絞る織女星の様子を詠んでいて、右歌に近いところがある。

あけゆけば露やおくらむ七夕の天の羽衣おししぼるまで(『朝恒集』三二二)

【備考】十七番左歌は『新古今集』(三〇〇)に収められている。

十八番 左歌

三五おほかたの露には何のなるならんたもとにおくは涙なりけり

右

三六 ころなき身にも哀はしられけり鳴たつ沢の秋の夕ぐれ

しぎたつさはのといへる、心幽玄にすがたおよびがたし。但、左歌、露にはなにのといへる、詞あさきにて心ことにふかし。

勝つべし。(大成)

【通釈】

十八番 左勝

三五 広く野に置く露には、何がなっているであろう。わたしのたもとに置く露は、(秋にもの思う)涙であるが。

右

三六 ものの趣も分らないわたしにも、しみじみと心をうつものが感じられる、——鳴の飛び立つ(羽音に静けさの破られる)沢べの秋の夕暮れよ。

(右の歌の)「鳴立つ沢の」と詠んでいるのは、その心が幽玄で、その姿が余人には及びたいものがある。しかし、左の歌の、「露にはなにの」と詠んでいるのは、その言葉が一見深みがなく素朴とも見えるが、思い入れの特に深いところが感じられる。

(左の)勝と判定しよう。

【注】○おほかたの露 「おほかたの」は、一般の、の意。広く言えは「この世界に置くふつうの露」(新日本古典文学大系『中世和歌集 鎌倉篇』)であろうが、具体的には「野原一面に置いた露」(新日本古典文学大系『千載和歌集』)を指すと見てよいであろう。○ころなき身 (1)情趣を感じる心から離れた出家の身、という風に解する説と、(2)情趣の分らない身、と解する説と、大別すれば二種類の解釈上の説があるかと思う。そして西行の境涯を考慮に入れて前者のように解する説が少なくない。しかし、「心なき身」の類の語を用いた歌としては、古くは『後撰集』の伊勢の歌「心なき身は草葉にもあらなくに秋くる風にうたがはるらん」(二八六)、また近い時期には『千載集』の藤原季通の歌「心なきわが身なれども津の国のはの春にたへずも有るかな」(一〇六)や「野わきするのべのけしきをみる時は

心なき人あらじとぞおもふ」(二五八)があり、これらは後者のように解すべき用例である。久保田淳氏はこの点を含めて考察し、「西行は謙遜してこのように歌ったと考える」(『新古今和歌集全評釈』)とされる。○鳴たつ沢 鳴の飛び立つ沢。この「立つ」を佇立している意とする試解も出されたが、鳴はその羽音が詩歌に歌われる場合の一つの伝統となっている点(『国語と国文学』昭和四十四年四月号、金子金治郎氏「鳴の歌」参照)から、やはり飛び立つ意とする方が妥当であろう。○幽玄 「幽玄」は、奥深さを中心とする観念を示す語であったが、人により、また時によって内容に相違する点も見られる。俊成の師の基俊の判詞の用例では、歌の作者の心が世俗の世界を離れて、幽遠な世界、または幽寂な世界に向けられているような場合に、評語として用いられていると思われる。俊成の判詞の用例でも、『御裳濯河歌合』のころまでは、基俊の見方を継承した用法と見られるものが多い、ここで「心幽玄」と評するのも、作者の心が幽寂な世界に向けられ、歌に深い寂しい境地が感じられる点を言ったかと思う。○すがたおよびがたし 歌の姿が他人には及びたい優れた特長をもっている。

【考察】十八番は、左が「露」の歌、右が「鳴」を詠み入れた「秋の夕暮れ」の歌である。

二首ともに『山家集』『西行上人集』『山家心中集』に見え、『山家集』では、左歌(二九四)は「露を」として、右歌(四七〇)は「あき、ものへまかりけるみちにて」として出ている。『西行上人集』では、左歌(一七四)は「露」、右歌(一七二)は「鳴」と題されている。『山家心中集』(新日本古典文学大系『中世和歌集 鎌倉篇』)による)では、左歌(二二二)は「秋の歌よみ侍しに」として出ている六首中の一首、右歌(二三四)は「ものへまかりしみちにて」として出ている。なお『千載集』中の左歌(二六七)、『新古今集』中の右歌(三六二)は、いずれも「題しらず」である。

左の歌は、自分のたもとに置く露は涙だが、広く自然に置く秋の露は何がなったものであろう、と詠んでいる。一首は『中世和歌集 鎌

倉篇』にも参考に引かれる『古今集』の次の歌と比較すると、その特徴が明らかになる点があるかもしれない。

おほかたの秋くるからにわが身こそかなしきものと思ひしりぬれ
(一八五、よみ人しらず)

同じく「おほかたの」で始まって秋の悲しみを歌うが、『古今集』の歌が自分という悲しい存在に焦点を絞っていくのに対して、西行の歌は自己の悲しみに基づき、外部に広がる秋の自然に心を向けているところがあるようである。

右の歌は、『山家集』の詞書に「秋、ものへまかりけるみちにて」とあるように、実景に即して詠まれたものである。秋の夕暮れの沢への静寂を急に破って鳴が舞い立ち、再び静寂に包まれる、その世界に浸る作者の感動を詠んでいる。ただ、「心なき身にも哀はしられけり」は、感動そのものを表しているのではなく、感動する作者について説明した点が見られ、問題があるとすれば、そういう点ではないかと思う。窪田章一郎氏は、

説話の材料となつたためもあって、有名な一首であるが、ポーズの如きものを見せているのも、晩年の熟した歌境とはいいがたいところがある。(『西行の研究』)

とも言われるが、これもその点と関連があるろうか。

俊成の判詞は、右歌に「鳴たつ沢の」などと詠んだのを「心幽玄にすがおよびがたし」と評する。世俗を離れた深い静寂の境地が表現され、余人の及びがたい姿と評価したと見られる。しかし、左歌に「露には何の」などと詠んだのを「詞あさきに似て心ことにふかし」と評し、左歌を勝と判定している。これについて考えたと「おほかたの露には何のなるならん」という下句は一見素朴な問いかけとも見えるが、自分の感傷の世界にこもらず、外部の広い秋の自然の世界に心を及ぼし、大きな自然界の秋の本質的なあわれさに注目した時の心を、さりげなく表現したと見て、その点を特に高く評価したのではなからうか。一方、右歌を俊成は『千載集』にも収めていないから、これを

一応評価はするものの、さほど高くは評価しなかったと思われる。それはやはり前述のような右歌の上句の説明的な点に俊成が同感しなかったのではないか。

【備考】十八番左歌は『千載集』(二二六七)に、右歌は『新古今集』(三六二)に収められている。

十九番 左勝

三七あし曳の山かげなればと思ふまに木末につぐる日ぐらしのこゑ
右

三八山里の月まつ秋の夕ぐれは門田の風の音のみぞする

左、木ずゑにつぐるといへる、心ふかくゆゑありて聞ゆ。ただし、此まにといへる詞ぞ、又常によむ事なれど、猶思ふべくやとおぼえ侍る。かやうのことは人かへりてわらふべき事なり。しかれども一身のおもふところを、このついでに申しいつるなり。右歌は、難とすべき所なくは見えながら、又人よみつべき事にや。猶左末句の心まさると申すべくや。

【通釈】

十九番 左勝

三七山陰だから暗いのだろう、と思ううちに、こずえで日暮れを告げる、ひぐらしの声が聞こえてきた。

右

三八山里の、月の出を待つ秋の夕暮れは、家の前の田(の稲の葉)を吹く風の音だけが聞こえる。

左の歌は、「こずえにつぐる」と詠んでいるのが、思い入れが深く、趣のあるものと思われる。ただし、この歌で「まに」と言っている言葉は、一般に歌に詠むことではあるが、(一首の表現の上でどんなものか)やはり考える必要があるかと思われ、(一首の表現の上)す。こういう指摘をすることは、かえって人から笑われることだと思ふ。けれども私個人として思うところを、この機会に言ってみ

るのである。右の歌は、欠点とするところがないとは見えるもの、また外の人も詠みそうなことであろう。やはり左の歌の下句の心が勝ると言うべきかと思う。

【注】○あし曳の もとは「あしひきの」であるが、平安時代末期ごろから「あしびきの」と発音されたらしい。「山」にかかる枕詞。○木末 こずえ。幹・枝の先。○日ぐらし 夕方や早朝などに「カナカナ」と鳴く蟬。「萩の花咲きたる野辺に日晩之の鳴くなるなへに秋の風吹く」(『万葉集』卷十秋雑歌二二三五)のように、古来秋の景物とされた。○門田 かどた。門の近くの田。家の前の田。「山田」に対して言う。○此まにといへる詞 この「まに」といへる詞。諸本この形の本文が多く、これによれば左歌の第三句「思ふまに」の中の「まに」を当面問題の語句としてとり上げたことになる。ただし『平安朝歌合大成』の底本「思ふまに」といへる詞によれば、「思ふまに」を問題の語句としたことになる。○末句 短歌の第五句だけを指す場合などもあるが、一般には第四句と第五句、すなわち下の句を言う。公任の『新撰髓脳』にも「上の三句をば本と云ひ、下の二句をば末といふ」とある。本文の場合、「左末句の心まさる」と記されており、左歌について見ると第五句「日ぐらしのこゑ」だけでは「心まさる」とは言えないであろうから、「木末につぐる日ぐらしのこゑ」という下二句を指すと見られる。

【考察】十九番は、左が「ひぐらし」(の声)の歌、右が「秋の夕ぐれ」(の風の音)の歌で、山里の秋の夕暮れの聴覚に関する点で共通する。

二首のうち左の歌は、『西行上人集』(一七三)に「ひぐらし」の題で出ている。右の歌は、これ以前の歌集に見えない。

左の歌は、『古今集』の次の歌の影響が考えられそうである。

ひぐらしのなきつるなへに日はくれぬと思ふは山のかげにぞありける(二〇四、よみ人しらず)

この『古今集』の歌の、日暮れを告げるひぐらしの声と、山陰の暗さ

との関係を、西行の歌は逆にして詠んだようなところがある。しかし素直な詠み方で、実景実情に基づく作であろうと思われる。そして「木末につぐる日ぐらしの声」は、十六番左歌でほととぎすの声を「と山のすそにこゑの落ちくる」と詠んでいたのと同様、響いてくる声の位置を適確にとらえた表現のように思う。

右の歌も情景が素直に詠まれており、「門田の風の音のみぞする」は、稲の葉すれの音だけが聞こえる。静かな秋の夕暮れの雰囲気を与えている。ただ平淡な詠み方で、俊成の判詞に指摘するように個人的な特色に欠けると言えそうである。

俊成の判詞は、左歌に「木ずゑにつぐる」ひぐらしの声と詠んだ点を「心ふかくゆゑありて聞ゆ」と、思い入れの深さと情趣の点で評価している。

しかし俊成はその上で、左歌の「あし曳の山かげなればと思ふまに」の「まに」と詠んだのを問題点として指摘している。もっとも『平安朝歌合大成』の底本によれば「思ふまに」を問題点としたことになる。一般に「まに」を用いた歌はかなり多く、例えば『古今集』では「さくと見しまに」(七三)、「春のゆくへも知らぬまに」(八〇)、「ながめせしまに」(一一三)、「つゆのまに」(二七三)、「人の心を知らぬまに」(三九八)、「時まつまにぞ」(四五四)、「待つとせしまに」(七七〇)、「恋ひわたるまに」(八二六)等の用例が見られる。俊成の撰んだ『千載集』でも、「過ぐるまに」(五六七)、「涙を人につつむまに」(八一四)、「なげくまに」(九三八)、「あふとせしまに」(一一八三)等の用例がある。一方「思ふまに」を用いた歌は比較的少なく、『千載集』までの勅撰集の範囲で見れば、『後拾遺集』に、

み山木のこりやしぬらんと思ふまにいと思ひのもえまさるかな(七七三、藤原元真)

の一首があるくらいである。『拾遺抄』には、

しらなみのうちやかへすと思ふまにはまのまさごのかずぞまさる(五三二、村上天皇)

の一首も見えるが、この歌は『拾遺集』(五五二)では三句が「まつほどに」となっている。

俊成はなぜ「まに」、あるいは「まに」を含む「思ふまに」を問題にしたのであろう。この歌合の十番判詞で「ふりさけし」を問題にした場合や、十三番判詞で「玉のを柳」(の「を」)を問題にした場合は、伝統的にそういう用語例の乏しいことが考慮されていたと思われる。(『六百番歌合』春上十一番判詞で「ながめかな」を問題にした場合も同様である。)しかし「まに」は前述のように『古今集』にも多く用いられている語であるから、そのような点に関する問題ではなかったはずである。すると、この歌合の十一番判詞で「見せがほに」を問題にした場合などと共に、語感の上で洗練された歌語と俊成が認めなかったと見てよいであろうか。ただ「まに」は『古今集』以来の用例を見ると表現上必ずしも不適當ではないように思われるし、それにこの語は場合によっては排除すると表現が不便になる類の用語とも思われる。

俊成が問題にしているのは「此まにといへる詞」なのであるが、それは「まに」の語だけに限定して見るべきであろうか。この歌の言葉続きの中の「まに」と受けとつてもよいのではないか。「思ふまにといへる詞」という本文もある。「思ふまに」を含めて前後の言葉続きに注目してみたいと思う。

「思ふまに」を用いた西行の歌が、先にも出ていた。八番右歌、

ふけにける我が世のかけを思ふまにはるかに月のかたぶきにける
の一首で、これは後に『新古今集』(二五三六)に収められた歌であるが、俊成はその判詞で「思ふまに」を問題にしていない。「思ふまに」をそこで問題にせず、後出の十九番左歌で問題にしたのは、二首の言葉続きに何か違いがあったのではないか。そういう風に見ると、八番右歌の「我が世のかけを思ふまに」に比較して、十九番左歌の「山かげなればと思ふまに」は、「……と思ふまに」という言葉続きがやや冗長とも見られ、歌の調子がそこで滞るような感じがあるので

はないか。その点でここは「……と思ふまに」と「まに」を用いて表現する必然性があったかどうか、そういう問題を俊成は指摘したのではなからうか。

右歌については、別に欠点とするほどのところはないが、余人も詠みそうな、個性的な特長に乏しい作と俊成は見ているようである。そして左歌の、部分的に問題はあっても下句に特長の認められる作を、より高く評価して勝と判定している。こういう評価の仕方は、当然のことではあるが、大局的な判断を誤らない俊成の鑑賞眼の確かさを示すものである。